

研究資料

中学校保健体育教員を対象にしたダンス指導の研修プログラム開発
～教材理解の促進に焦点をあてて～

廣兼志保(島根大学) 梶谷朱美(島根県立大学)

Development of a Dance Education Study Training Program for Junior High School Teachers:
Focusing on Promotion of Teaching Materials Comprehension

Shiho HIROKANE, Shimane University,
Akemi KAJITANI, The University of Shimane

Key words : junior high school physical education teachers, training program for instruction of dance education, training program development , teaching material design theory

Abstract

This study aimed to develop a training program of instruction of dance education for junior high school physical education teachers adopting an activity style to learn, discuss and think with trainees about the theory of teaching materials. The aim of the program was as follows : ① The trainees learn to build a plan of teaching materials based on theories of making teaching materials. ② Depending on the learning contents that the trainees want their students to achieve, they learn to select appropriate teaching materials and design learning activities. All the trainees could understand the theory of making teaching materials. On the other hand, it seemed to be difficult for them to comprehend the hierarchical characteristics of the teaching materials and characteristics of the dance domain. The aim of this program was achieved, and furthermore, learning theories of making teaching materials became an effective opportunity to expand the knowledge about instruction of dance. Also, the activity form of group work was effective, as it allowed trainees to discuss and consider dance instruction.

要約

中学校保健体育教員を対象に、教材作りの理論を学び受講者同士で話し合い、考える活動形態をとったダンス指導研修プログラムの開発を試みた。その結果、研修プログラムのねらいである①「教材づくりの理論に基づいて教材案を構想し実践できる」②「生徒に習得させたい学習内容に応じて教材を選択し学習活動を構成できる」はほぼ達成された。教材づくりの理論については全員が理解できていたが、教材の階層性やダンス領域の特性に関わる教材理解については難しさがあった。しかし、教材づくりの理論を学んだこと自体は、ダンス指導についての知見を広げたり深めたりする機会となった。また、受講者同士で話し合ったり考えたりする活動形態はダンス指導についての知見を広げたり深めたりするうえで有効であった。

(Institution)

Address : Faculty of Education, Shimane University

1060 Nishikawatsu-cho, Matsue-shi, Shimane, 690-8504, JAPAN

The University of Shimane

7-24-2 Hamanogi, Matsue-shi, Shimane, 690-0044, JAPAN

1. 本研究の動機

1-1. S 県における中学校教員を対象にしたダンス研修の位置づけと経緯

S県では、スポーツ庁による助成事業として、平成27年から29年まで、東部地区と西部地区に分けて毎年2回ずつ、中学校保健体育教員を対象に、武道とダンスの教材や指導法に関する実技研修を実施してきた。この研修は県内4つの教育事務所管内の各中学校から1名ずつの教員が受講する。3年間で全ての中学校が研修を受けるよう運営されている。平成29年で県内全中学校の教員が研修を修了し、研修第1期が完了した。平成30年からは第2期が始まり、新たな研修プログラムが稼働することとなった。そこで、今までの受講者を対象に実施したアンケート調査の結果をもとに、新プログラムの内容を検討することとした。

1-2. 新プログラムの構築に向けての方針

平成29年度にS県で実施された教員研修の成果について、同県教育庁保健体育課がアンケート調査を実施したところ、東部・西部いずれの地区もダンスの指導法の理解が進んだことがわかった⁹⁾。しかしその一方で、同調査における以下の自由記述の回答からは、教員研修における次なる研修の課題を見出すことができた。

「自分自身は楽しかったが、生徒に指導する自信がない」「生徒達に向けて授業をされている様子などを見せたい」「各校の実践を伝える場があると良かった」(下線部は筆者付す)

これらの回答の下線部に着目すると、受講者達は、様々なダンス教材の体験を通して、個々の教材の指導法を理解することができたが、生徒の実態に応じてどのように指導計画を具体化していったらよいかについてはイメージができず、そのため、他の教員の指導実践を参考にしたいと考えているのではないかと推察できる。

このような状況を解決するには、研修の受講者達が生徒の実態に応じて、学習内容を明確に設定しどのような教材によって具体化するかを構想できるようにすることが必要であると思われる。したがって、次なる研修の課題は、授業の目標としての学習内容と、それを具体化する手段としての教材を構想できる力を育成する研修プログラムを

開発し実践することであるといえる。

教材を構想するためには、学習内容を明確に絞り込むことが必要である。そして単元における学習内容の発展と学習活動の展開過程を理解したうえで、教材を構想することとなる。このような構想の仕方ができれば、授業で学習者に何を身につけさせたいかが授業者にも学習者にもわかる授業づくりができるのではないかと、筆者らは考えた。

そこで、筆者らは、課題の解決に向けて、岩田靖(1987,1994,1997,2012,2015)が提唱する体育科教育における教材づくりの理論¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾の枠組みを適用した研修プログラムを開発し、実践することとした。

岩田(2015)は、教材という概念を以下のように規定している。すなわち、教材という概念は「教科内容^{注1)}を学習者に習得させるための手段であり、その教科内容の習得をめぐる教授=学習活動の直接の対象となるもの」⁶⁾であるとされる。

岩田の授業づくりの理論の枠組みにしたがえば、教師は習得すべき学習内容を明確にすることを前提に、教材づくりや教材の選択に取り組むこととなる。岩田の教材づくりの理論を枠組みとした研修プログラムを開発し実施することで、受講者達は、何を学ぶためにどんな活動をするのかを追究しながら授業計画を構想することが期待される。

また、研修プログラムを新たに開発するにあたり、研修内容に即して実施方法についても転換をはかった。平成29年度までは受講者達は講師の指導のもとで模擬授業形式の実技研修を行っていた。それに対して、平成30年度からはグループワークにより受講者同士が互いに話し合いアイデアを出し合って模擬授業を創る演習形式を採用することとした。受講者達の主体的な参加を促すとともに仲間とアイデアを共有し発展させていける場を創るためである。

受講者主体のグループワークを中心とした研修を実施する際には、研修時間の制限があることから、マイクロティーチングとして実施しなければならない。したがって、模擬授業の展開のどこを切り取るかを考える必要がある。そこで、筆者らは本時の学習内容の見通しを授業者と学習者が共有する場としての導入に着目した。なぜなら、導

入は、学習者の学習意欲を喚起し「運動の面白さに誘い込む」⁵⁾役割をもつと同時に、本時の学習における目標設定や本時の見通し・方向性、課題解決の手がかりを投げかける場でもあるからである。導入において本時の目標につながる下位教材を工夫することで、ダンスが得意な生徒だけでなく苦手意識や抵抗感を持つ生徒にも「自分にもできるかもしれない」「やってみようかな」という気持ちを持たせることが重要であると筆者は考える。

そこで、研修プログラムの開発において、導入段階で生徒の学習意欲を引き出し単元教材につなげられるような、階層的な下位教材づくりについての理解を促進することを目指すこととした。

1-3. 研修プログラムのコンセプト

以上の方針をふまえて、平成30年から始まる第2期研修プログラムでは、より実践の具体につながるように以下のコンセプトを掲げた。

①知識・技能アウトプット型の研修プログラムにより、教材づくりの理論に基いて教材案を構想し実践する力の向上をめざす。

②研修の目標を「ダンス授業の導入で、教材の種類や、習得すべき学習内容から導き出された活動のねらいを明確にし、ねらいに応じた下位教材を構想し、実践できる。」と設定し、生徒に習得させたい学習内容に応じて教材を選択し、学習活動を構成できることをめざす。

③研修は県内の各教育事務所管内の地区単位で実施される。そこで、グループワークを通して、地区内各校の異世代の教員同士が交流しながら課題解決に取り組み、解決策を共有できるような活動を取り入れる。

2. 本研究の目的と方法

2-1. 本研究の目的

本研究の目的は、平成30年に実施したダンス指導研修において、教材を構想し模擬授業を実施し合う知識・技能アウトプット型研修プログラムが有効であったかを考察することである。考察の視点は以下の2点である。

視点(1) 岩田の教材づくりの理論を枠組みにした教員研修プログラムは有効だったか。

視点(2) 研修プログラムに、受講者同士が対話しながら模擬授業を作り上げていく活動を取り入れたことは有効だったか。

2-2. 本研究の方法

2-2-1. 本研究の方法の概要

考察の視点(1)については、以下のような方法で考察をすすめた。

○研修後にアンケート調査を実施し、教材づくりの理論について理解できたと捉えている受講者がどれくらいいるかを明らかにした。

○研修プログラム中に授業者役の受講者に書かせた構想ワークシートの記述内容から、教材の種類や活動のねらいを明確にして下位教材を構想できていたかを確認した。

○研修プログラムの振り返り時に受講者に書かせたコメントカードへの記述内容から、教材の種類や活動のねらいに応じた教材が実践できていたかを確認した。

考察の視点(2)については、以下のような方法で考察をすすめた。

○研修後にアンケート調査を実施し、グループワークや模擬授業とふりかえりを取り入れたことを有効だったと捉えている受講者がどれくらいいるかを明らかにした。

そして、視点(1)と視点(2)に関する考察の結果から研修プログラムが有効であったかを評価した。

2-2-2. 研修プログラムの概要

研修プログラムの概要は以下の通りである。

実施日時：平成30年10月18日～19日

このうち、19日の9:00～15:00に実施した研修プログラムを考察の対象とした。

実施場所：S県立体育館 受講者数：34名

考察の対象とした研修プログラムの実施内容は、以下の通りである。

- ・教材づくりに関する理論の講義
- ・下位教材例の体験
- ・各校での実践情報の交換
- ・構想ワークシートを用いた指導案の作成
- ・模擬授業の実施
- ・コメントカードによる相互評価と振り返り
- ・指導講師からの評価と助言

2-2-3. 事後アンケート調査の実施

研修後に質問紙調査を実施した。視点(1)に対応して、教材づくりの理論の理解度と有効性に対する受講者の意識を知り、視点(2)に対応して、グループワークや模擬授業と振り返りを採用したことの有効性に対する受講者の捉えを知るためである。調査期間は平成30年12月17日～平成31年1月18日で、回収率は88%であった。

調査の質問項目は、表1に示す通りである。研修は東部会場と西部会場の2箇所ですべて2回に分けて実施されたが、研修プログラムの内容の都合上、本研究では西部会場で実施した研修に対する回答のみを考察の対象とした。また、プログラムの成果と課題を検証するため、本研究では質問項目のQ10～17を考察の対象とした。

表1.アンケート調査の質問項目

質問番号	質問項目の内容
Q1	受講されたのは、東部と西部のどちらですか。
Q2	今年度ダンスの授業を行いましたか。
Q3	ダンスの授業を実施しなかった理由は何ですか。
Q4	今年度実施しているダンスにはどのような種目がありますか。
Q5	ダンスの授業の実施時期はいつですか。
Q6	ダンスの授業はどのような形態で実施していますか。
Q7	「地域指導者を活用している」方に聞きます。地域指導者を活用している効果は何ですか。
Q8	研修内容を授業で活用し、生徒の様子に変化がありましたか。
Q9	ダンス研修会受講後、ご自身の授業に関して変化がありましたか。
Q10	「教材づくりの基本的視点」について理解できましたか。
Q11	「階層的な教材づくり」について理解できましたか。
Q12	「ダンス授業における下位教材の3つの類型」について理解できましたか。
Q13	「ダンス授業の導入における下位教材の例」について理解できましたか。
Q14	ダンス授業の学習内容や教材についての理論を学んだことは、ダンス指導に関する知見を拡げたり深めたりするのに有効でしたか。
Q15	グループワークを通して教材の構想と実践に取り組んだことは、ダンス指導に関する知見を拡げたり深めたりするのに有効でしたか。
Q16	模擬授業形式でダンス教材を体験したことは、ダンス指導に関する知見を拡げたり深めたりするのに有効でしたか。
Q17	受講者全員で模擬授業の振り返りをしたことは、ダンス指導に関する知見を拡げたり深めたりするのに有効でしたか。
Q18	研修に関してご意見・ご要望がございましたら、ご記入ください。

各質問項目には4件法により受講者に回答してもらった。Q10～Q13の回答は、「理解できた」を4点、「ほぼ理解できた」を3点、「あまり理解できなかった」を2点、「理解できなかった」を1点と換算し、各質問項目の平均得点を算出するとともに、各回答への度数分布を集計した。Q14～Q17の回答は、「有効だった」を4点、「やや有効

だった」を3点、「あまり有効でなかった」を2点、「有効でなかった」を1点と換算し、各質問項目の平均点を算出するとともに、各回答への度数分布を集計した。

2-2-4. 構想ワークシートとコメントカードの分析

視点(1)に対応して、模擬授業で使用した構想ワークシートとコメントカードを分析した。実際にねらいに応じた教材が実践できていたかを明らかにし、研修の有効性を考察するためである。受講者の了承を得た後、指導者役の受講者グループが教材の構想の際に作成した構想ワークシートと、全受講者が模擬授業実施後に記述したコメントカードを提出してもらい、記述データを収集した。

ワークシートD

ダンス指導の構想 ～導入の10分間の活動に焦点をあてて～

グループ名: Bグループ メンバー: 糸田、園山、鳥居、菊生、佐々尾、藤井

本時のめあて: (本時 2 / 8)
"重く-止まる"の動きを十分に、変化のあるひと流れの重さで表したいイメージを表現することができるようになる。

教材名: 創作ダンス (1年生)

活動のねらい: (アイスブレイク型・運動感覚育成型・構成原理理解型の中から選択し、具体的なねらいを記述)
運動感覚育成型

活動内容と手順	活動	備考
時間配分	1. ウォーミングアップをする。 1人 ... 走り止まる。 2人組 ... まねをする。	
	2. 本時のねらいの確認。	
	3. 重く-止まるの具体的な説明 グループ活動	
	4. まとめ	

役割分担: (T1,T2,観察記録タイムパ-など)
T1 授業 ... 糸田
T2 音程 ... 園山
タイムパ- ... ? 園山

準備物:

図1.ダンス指導の構想ワークシート例

構想ワークシートからは受講者の記述から「下位領域名^{注2)}」「教材名」「教材の類型」「活動のねらい」を読み取って整理した。コメントカードからは「活動のねらいの達成」について書かれた文章を抽出した。授業者役が設定した「教材の類型」及び「活動のねらい」と受講者が教材の体験を通して得た「活動のねらいの達成」に関するコメントを対照し、活動のねらいと教材が合致していたかを考察した。

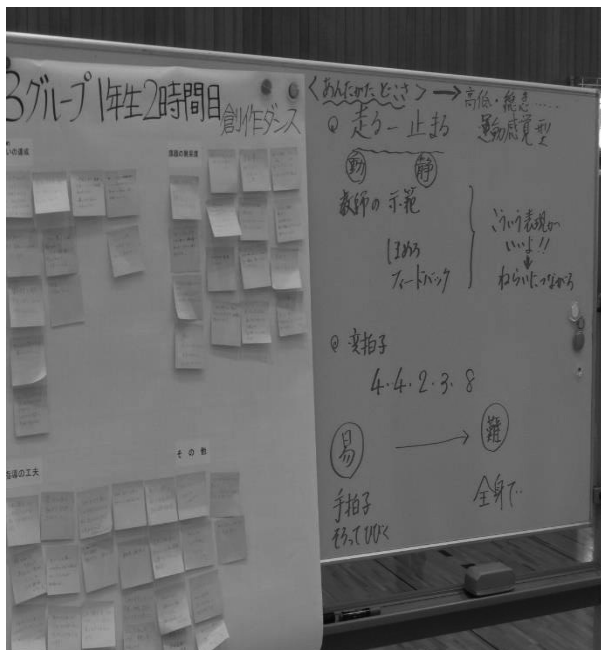


写真 1.コメントカードを用いたふりかえり

収集した記述は萱間(2007)が提示する質的データの分析方法⁶⁾を参考に分析した。文の主旨を要約してコード化した後、記述内容が類似したコード同士を集めてカテゴリーを生成し分類した。次に、各カテゴリーに「空間」「運動感覚」などのカテゴリー名を付けた。そして、各カテゴリーに分類されたコードの件数を付したうえで、代表的なコメントカードの記述を示した。記述中のコード化した文言には下線を付して示した。コード化とカテゴリーへの分類や考察の際は、教歴36年と教歴27年の大学教員2名で協議し意見が一致した結果のみを採用し、教歴20年と教歴18年の保健体育科指導主事2名のチェックを受けた。

3. 研修の概要

3-1. 教材構想のための理論

前述のように、本研修プログラムでは、岩田靖(2012)が提示した教材づくりの理論に基づいて教材を構想することとした。そのため、教材づくりの理論の講義で、岩田が示した教材づくりの基本的視点(岩田,2012,p.26)と階層的な教材づくり(岩田,2012,p.28)を示した。そのうえで、ダンス授業における下位教材の類型を提案し、全員で実際に動きながら各類型の教材例を体験した。

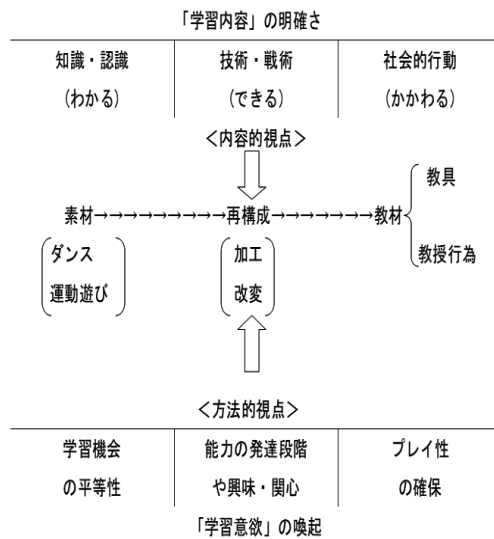


図2.教材づくりの基本的視点[岩田(2012)を参考に廣兼が改変(2018)]^{注3)}

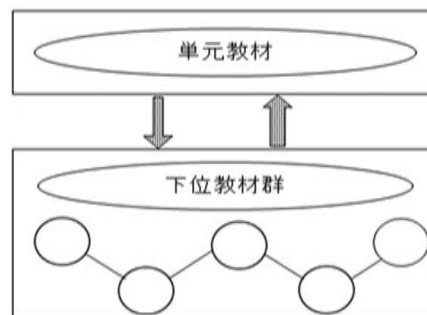


図 3.階層的な教材づくり(岩田,2012)

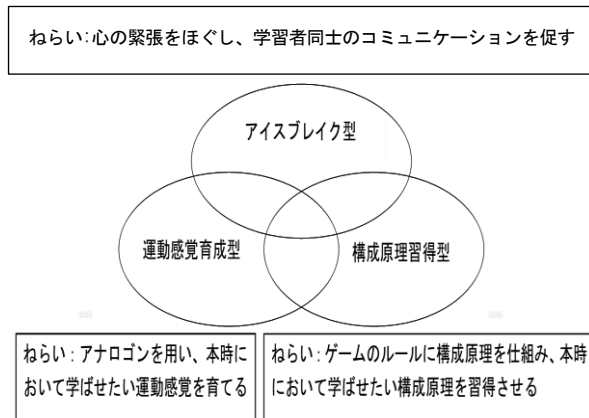


図 4.ダンス授業における下位教材の類型

図4に示したダンス授業における下位教材の類型は、筆者が考案したものである。本研修は、現代的なリズムのダンスや創作ダンスといった下位

領域の違いを超えて共通に指導できるコンピテンシーに基づいて学習内容を策定し教材を構想することをめざしている。

そこで、情意・運動・認識の観点から下位教材の類型を整理し、ダンスの学習に向かうための情意に関する学習内容に対応する教材として「アイスブレイク型」、ダンスを行う際に必要となる運動感覚づくりに関する学習内容に対応する教材として「運動感覚育成型」、ダンスを創る際に用いる空間や時間や力性を構成する原理(以下、構成原理と称する)を理解し身に付けるための学習内容に対応する教材として「構成原理育成型」の3類型を設定した。

各類型の教材の主なねらいは、以下のように指定した。「アイスブレイク型」は、心身の緊張をほぐし、学習者同士のコミュニケーションを促すことをねらいとした。「運動感覚育成型」は、アナログを用い、本時において学ばせたい運動感覚を育てることをねらいとした。「構成原理習得型」は、ゲーム的要素を取り入れる際に、ゲームのルールに構成原理を仕組み、本時において学ばせたい構成原理を修得させることをねらいとした。

また、図4の各類型の重なり部分は、同一の教材が複数の類型にまたがったねらいをもつ場合もあり得ることを表している。

各類型の教材の具体例と主に身につけさせたい感覚や知識を表2に示した。研修では図2～4と表2を用いて理論の講義をした後表1に示す3つの類型と教材の具体例を全員で動いた。

このようにして、体験もまじえて教材づくりの理論を学んだ後、下位教材の作成に取り組んだ。

表2.下位教材の類型と具体例

類型	主に身につけさせたい感覚や知識	教材の具体例
アイスブレイク型	誰とでもスムーズに組める仲間づくり	洗濯ゲーム
運動感覚育成型	音楽リズムにおけるアクセント位置の変化	アルプス一万尺
構成原理習得型	「高低」の構成原理	ウルトラマンじゃんけん

3-2. 受講者が作成した下位教材

3-2-1. 教材作成の条件

本研修では、受講者は以下のような条件下で教材を作成した。

- ①1 グループあたり 5～6 人から成る 6 つのグループに分かれて、1 時間の授業の導入にあたる約 10 分間の活動を考える。
- ②単元の下位領域は創作ダンスまたは現代的なリズムのダンスとし、各グループが担当する下位領域・対象学年・時間はくじ引きで指定される。
- ③教材を構想する際は、以下の参考資料を参照してよいこととする。

文部科学省(2018)『中学校学習指導要領解説(保健体育)』⁸⁾

文部科学省(2013)『学校体育実技指導資料第9集 表現運動及びダンス指導の手引』⁷⁾

全国ダンス・表現運動授業研究会(2011)『明日からトライ!ダンスの授業』¹¹⁾

4. 結果と考察

4-1. 事後アンケート調査の結果

4-1-1. 教材づくりの理論の理解度と有効性について

表3より、各質問項目の平均点をみると、Q11とQ12を除いてはいずれも4点満点中3点台であり、Q11とQ12においてもそれぞれ2.9と2.8であったので、全体としては、概ね理解でき、有効な研修であったと評価できる。Q10～13は研修内容の理解度について尋ねた質問であり、Q14～17は研修活動の方法について尋ねた質問である。

まず、表4より、研修内容の理解度について、

表3.質問項目ごとの平均点

質問項目	単位(点)	平均点
Q10「教材づくりの基本的視点」の理解		3.2
Q11「階層的な教材づくり」の理解		2.9
Q12「下位教材の類型」の理解		2.8
Q13「下位教材の例」の理解		3.1
Q14理論の学習の有効性		3.5
Q15グループワークの有効性		3.6
Q16模擬授業形式の有効性		3.6
Q17振り返りの有効性		3.5

Q10～13の調査結果を考察する。

表4.Q10,Q11,Q12,Q13の回答者の分布

回答	単位(人)	Q10	Q11	Q12	Q13
理解できた		5	2	3	7
ほぼ理解できた		25	24	18	19
あまり理解できなかった		0	4	8	4
理解できなかった		0	0	0	0
無回答		0	0	1	0

Q10～11は、保健体育科の運動領域全般に共通する教材づくりの理論を対象に、理解度を尋ねた質問である。Q10は、平均点が3.2であり、全員が「理解できた(5名)・ほぼ理解できた(25名)」と答えていることから、理解度が高かったといえる。それに対してQ11は、平均点が2.9とやや低く、「あまり理解できなかった」と答えた受講者が4名あった。これらの受講者にとっては、運動領域全般に共通する教材づくりの基本的視点は理解できたが、個々の下位教材がどのような階層性に基づいて単元教材につながる構造を構成していくかについての理解が難しかったことが推察できる。

Q12～13は、どんな学習内容をどんな下位教材によって習得させるかという、ダンス領域の特性に関わる理解度を尋ねた質問である。Q12は平均点が2.8であり、「理解できた」と答えた受講者が3名、「ほぼ理解できた」と答えた受講者が18名、「あまり理解できなかった」と答えた受講者が8名であったことから、比較的理解度が低かったといえる。教材の類型について講義した後、各類型の教材の典型例を全員で動いたところ、Q13に示すように、平均点は3.1であり、「あまり理解できなかった」と答えた受講者が4名あったものの、「理解できた」と答えた受講者は7名、「ほぼ理解できた」と答えた受講者も19名であった。

よって、Q10～13の結果から、受講者は単体としての教材をどのようにつくるかという理論は理解できたが、単元のなかで学習内容の段階的な発展とともに教材をどのように展開させていくかという階層的な構造についての理論は理解が難しかった、ということがわかった。学習過程の展開に伴う教材のシークエンスを階層的な構造として

理解していけるような研修の工夫が求められる。

ダンス領域の学習内容や教材の理解については、受講者は具体的な下位教材の例を理解できたことがわかった。ダンス領域の学習内容を明確に提示することと、それらの学習内容を具体化するための教材を理論と関連づけながら体験的に学べるような研修の工夫が求められる。

次に、表5より、研修活動の方法の有効性について、Q14～17の調査結果を考察する。

表5.Q14,Q15,Q16,Q17の回答者の分布

回答	単位(人)	Q14	Q15	Q16	Q17
有効だった		15	18	18	16
やや有効だった		13	10	11	12
あまり有効でなかった		1	1	1	1
有効でなかった		0	0	0	0
無回答		1	1	0	1

Q14は、研修において学習内容や教材についての理論を学ぶことの有効性を尋ねた質問である。平均点は3.5であり、「あまり有効でなかった」と答えた受講者が1名いたものの、ほぼ全員が「有効だった(15名)・やや有効だった(13名)」と答えていることから、理論を学んだことは、ダンス指導についての知見を上げたり深めたりするのに有効であったと、受講者に捉えられていたといえる。

4-1-2. グループワーク・模擬授業・振り返りの有効性について

Q15～17は、異世代混合グループで他校の教員と交流しながら活動を行う研修形態の有効性を尋ねた質問である。Q15では、5～6人の小グループに分かれて教材づくりと模擬授業の構想と実践に取り組んだことの有効性を尋ねた。平均点は3.6であり、「あまり有効でなかった」と答えた受講者が1名あり、「有効だった」と答えた受講者は18名、「やや有効であった」と答えた受講者は10名であった。Q16では、模擬授業形式でダンス教材を体験したことの有効性を尋ねた。平均点は3.6であり、「あまり有効でなかった」と答えた受講者が1名いたものの、「有効だった」と答えた受講者は18名であり、「やや有効だった」と答

えた受講者は11名であった。Q17では、受講者全員で模擬授業の振り返りをしたことの有効性を尋ねた。平均点は3.5であり、「あまり有効でなかった」と答えた受講者が1名いたものの、「有効だった」と答えた受講者は16名であり、「やや有効だった」と答えた受講者は12名であった。

このことから、研修において、異世代の他校の教員と小グループで話し合いながら教材づくりと模擬授業の構想・実践・振り返りを行ったことは、ダンス指導についての知見を広げたり深めたりするのに有効であったと、受講者に捉えられていたといえる。

4-2. 各教材の内容と受講者のコメントの分析

次に、受講者は模擬授業においてどのような教材を構想・実践し、ねらいに応じた教材を構想し実践できたのかについて考察をすすめる。各グループが作成した教材の概要を表 6 にまとめた。

【教材名】彫刻バトル

【対象学年】3年生

【時間】4時間目

【教材の種類】構成原理習得型

【活動のねらい】全身で彫刻を創り、見ることで、見栄えの良さを伝える

【コメントカードの記述から生成されたカテゴリーと代表的なコメント】ただし、文中の〇内はカテゴリーに分類されたコードの件数、「」内は代表的なコメント、下線部はコードを示す。以下、BからFグループの場合も同様である。

空間(7件)「彫刻、広がり、空間、高低、連続性など、気づかせるよい教材だと思った」

ねらい(1件)「ねらいに迫るうえでとても良い取り組みだったと思います」

集中(1件)「考える時間が短いことで集中できた」

表 6.各グループが作成した教材の概要

グループ名	下位領域名	教材名	類型	活動のねらい	活動の概要
A	創作ダンス	彫刻バトル	構成原理習得型	全身で彫刻を創り、見ることで、見栄えの良さを伝える	グループの一人一人が次々と即興的に関わり全身で彫刻を創っていくと同時に2つのグループが彫刻を創り、個々の彫刻のよさ(見栄え)を比較し価値づけていく
B	創作ダンス	あんたがたどこさ	運動感覚育成型	走る一止まるの動きを手がかりに表したいイメージを表現する	あんたがたどこさの「さ」の部分に止まる動きを入れ、走る一止まるの動きをてがかりに2人組で互いの動きを真似しながらひと流れの動きを表現する
C	創作ダンス	ジェスチャーゲーム	アイスブレイク型 構成原理習得型	物事の特徴をとらえて、すぐに動く 題材の特徴にふさわしい動きを身につける	提示された課題(題材)をグループの一人が10秒以内で即興的に表現し、同じグループの仲間が表現された課題(題材)を当てる
D	現代的なリズムのダンス	尻文字で名前のチェーン 身体誕生日ゲーム	アイスブレイク型	仲間と一緒に身体表現をする楽しさを味わう	自分の名前の頭文字を尻文字で表現したり、誕生日を全身を使って表現したりしてグループの仲間がつながっていく
E	現代的なリズムのダンス	リズムにのってお掃除	運動感覚育成型	日常の動作をヒップホップに取り入れよう	ヒップホップのリズムの曲に乗り、日常の動作である掃除の特徴的な動きをグループで表現する
F	現代的なリズムのダンス	じゃんけんゲーム	運動感覚育成型	じゃんけんを通してステップの感覚を身につける	ヒップホップのリズムに乗って踊りながら2人組で足じゃんけんを行い、勝った人の動きを負けた人が真似ていく

4-2-1. Aグループの場合

【下位領域名】創作ダンス

【考察】

授業者役が設定した教材の種類が「構成原理習

得型」であり、活動のねらいが「全身で彫刻を創り、見ることで、見栄えの良さを伝える」であったのに対して、「空間」のカテゴリーに分類されたコードが7件あり、コメントの殆どを占めていた。「彫刻、広がり、空間、高低、連続性など、気づかせるよい教材だと思った」という代表的なコメントからは、教材「彫刻バトル」は空間の使い方や見せ方に関する構成原理の学習に適した教材であると理解されていることがうかがえる。ねらいに応じた教材が実践されたと評価できる。

4-2-2. Bグループの場合

【下位領域名】創作ダンス

【教材名】あんたがたどこさ

【対象学年】1年生

【時間】2時間目

【教材の類型】運動感覚育成型

【活動のねらい】走る一止まるの動きを手がかりに表したいイメージを表現する

【コメントカードの記述から生成されたカテゴリーと代表的なコメント】

空間・時間(3件)「知らず知らずのうちに緩急、高低がつけられる仕掛けだった」

空間(1件)「ストップするときのポーズの手本があったのでイメージしやすかった。そのおかげで高低の動きがでた」

運動感覚(1件)「動く、止まるの感じは分かった。導入としてちょうどよい」

教材の意義(1件)「最後の評価、動きとのつながりがわかる話があってよかった」

楽しさ(1件)「動く一止まるの動きを1人またはペアで行うことで楽しさが味わえ、自然と笑顔になれました」

ねらい(1件)「走る一止まるの動きそのもののねらいも達成できていた」

【考察】

授業者役が設定した教材の類型が「運動感覚育成型」であり、活動のねらいが「走る一止まるの動きを手がかりに表したいイメージを表現する」であったのに対して、「空間・時間」のカテゴリーに分類されたコードが3件、「空間」のカテゴリーに分類されたコードが1件、「運動感覚」のカテゴリーに分類されたコードが1件あった。

「知らず知らずのうちに緩急、高低がつけられる仕掛けだった」「動く、止まるの感じは分かった。導入としてちょうどよい」という代表的なコメントからは、教材「あんたがたどこさ」は緩急や高低の構成原理や運動感覚の学習に適した教材であると理解されていることがうかがえる。ねらいに応じた教材が実践されたと評価できる。

4-2-3. Cグループの場合

【下位領域名】創作ダンス

【教材名】ジェスチャーゲーム

【対象学年】1年生

【時間】3時間目

【教材の類型】アイスブレイク型・構成原理習得型

【活動のねらい】物事の特徴をとらえて、すぐに動く・題材の特徴にふさわしい動きを身につける

【コメントカードの記述から生成されたカテゴリーと代表的なコメント】

表現力(5件)「モチーフの表現をゲームを通してできた」

教材の意義(3件)「身体表現のためのジェスチャーゲームはとても有効だと感じた」

表現方法に関する知識(1件)「体で表現するきっかけOK。いろいろな表現方法を知る、気づくことにつながった」

教材の発展(1件)「似た動きの違いをまとめておられて、今後の作品作りに活かせる」

場づくり(1件)「その後の展開につながりやすく、場づくりと目的をつかむことが同時にできて〇〔原文ママ〕」

導入(1件)「人に伝える。→ジェスチャーでゲーム的にやってみる。授業のスタートによい」

自発的(1件)「ジェスチャーゲームという内容で生徒の自発的な動きを引き出していた」

共有(1件)「みんなで結果を共有できた」

【考察】

授業者役が設定した教材の類型が「アイスブレイク型」と「構成原理習得型」の混合型であり、活動のねらいが「物事の特徴をとらえて、すぐに動く・題材の特徴にふさわしい動きを身につける」であったのに対して、「表現力」のカテゴリーに分類されたコードが5件、「教材の意義」のカテ

ゴリーに分類されたコードが3件あった。「体で表現するきっかけOK。いろいろな表現方法を知る、気づくことにつながった」「モチーフの表現をゲームを通してできた」という代表的なコメントからは、教材「ジェスチャーゲーム」は物事の特徴をとらえてすぐに動くことをゲーム感覚で学ぶのに適した教材であると理解されていることがうかがえる。ねらいに応じた教材が実践されたと評価できる。

4-2-4. Dグループの場合

- 【下位領域名】現代的なリズムのダンス
- 【教材名】尻文字で名前のチェーン・身体誕生日ゲーム
- 【対象学年】1年生
- 【時間】1時間目
- 【教材の種類】アイスブレイク型
- 【活動のねらい】仲間と一緒に身体表現をする楽しさを味わう
- 【コメントカードの記述から生成されたカテゴリーと代表的なコメント】
 - 表現力(3件)「ひらがなを尻文字で表現→数字を体で表現。体の動かし方に違いがあり、いろいろと体で表現ができた」
 - 導入(2件)「体で表現する最初の段階としてわかりやすい。知っている字、数だからすぐにイメージできる」
 - コミュニケーション(2件)「非言語のコミュニケーションの機会があり、相手に伝えること、表現することができる良い機会であった」
 - アイスブレイク(2件)「最初の時間、仲間との出会い、アイスブレイク型GOOD」
 - ほぐれる(2件)「ダンスに抵抗がある生徒も緊張がほぐれ授業に入っていくやすい」
 - 動きのバリエーション(1件)『尻文字』は、体全体を使って、左右+上下の動きも組み入れることができよと思う」
 - 交流(1件)「一番最初の活動で仲間と交流できてよかった」
 - 楽しさ(1件)「尻文字で頭文字を伝えるのは楽しく取り組みそう」
 - 分かりやすさ(1件)「明確で分かりやすく活動できた」

【考察】

授業者役が設定した教材の種類が「アイスブレイク型」であり、活動のねらいが「仲間と一緒に身体表現をする楽しさを味わう」であったのに対して、「アイスブレイク」のカテゴリーに分類されたコードが2件、「コミュニケーション」のカテゴリーに分類されたコードが2件、「ほぐれる」のカテゴリーに分類されたコードが2件、「表現力」のカテゴリーに分類されたコードが3件あった。「ダンスに抵抗がある生徒も緊張がほぐれ授業に入っていくやすい」「体で表現する最初の段階としてわかりやすい。知っている字、数だからすぐにイメージできる」という代表的なコメントからは、教材「尻文字で名前のチェーン」「身体誕生日ゲーム」は初めて出会う仲間と一緒に身体表現をする楽しさを味わうのに適した教材であると理解されていることがうかがえる。ねらいに応じた教材が実践されたと評価できる。

4-2-5. Eグループの場合

- 【下位領域名】現代的なリズムのダンス
- 【教材名】リズムにのってお掃除
- 【対象学年】3年生
- 【時間】2時間目
- 【教材の種類】運動感覚育成型
- 【活動のねらい】日常の動作をヒップホップに取り入れよう
- 【コメントカードの記述から生成されたカテゴリーと代表的なコメント】
 - 動きのバリエーション(3件)「音楽に合わせてことで日常の動作をダンスのバリエーションとして使える」
 - 教材の発展(2件)「1人から同じ動きの人同士が集まれば、ワンシーン創作ダンスにつなげられてよいと思った」
 - モチーフの発見(2件)「日常の動きがヒップホップになるんだ！という驚きや発見があつて良い」
 - 教材開発(1件)「ヒップホップでこのような取組ができるとは思わなかった。新たな方法として取り入れていきたい」
 - オリジナリティ(1件)「オリジナリティが出てくるので本気になれば面白いと思った」
 - 分かりやすさ(1件)「日常の動作を取り入れた

ことは想像しやすくよかった」

【考察】

授業者役が設定した教材の類型が「運動感覚育成型」であり、活動のねらいが「日常の動作をヒップホップに取り入れよう」であったのに対して、「動きのバリエーション」の 카테고リーに分類されたコードが3件、「教材の発展」の 카테고リーに分類されたコードが2件、「モチーフの発見」の 카테고リーに分類されたコードが2件あった。「音楽に合わせることで日常の動作をダンスのバリエーションとして使える」「日常の動きがヒップホップになるんだ！という驚きや発見があって良い」という代表的なコメントからは、教材「リズムにのってお掃除」は日常の動きを手がかりにダンスの動きを考える学習に適した教材であると理解されていることがうかがえる。ねらいに応じた教材が実践されたと評価できる。

4-2-6. Fグループの場合

【下位領域名】現代的なリズムのダンス

【教材名】じゃんけんゲーム

【対象学年】2年生

【時間】2時間目

【教材の類型】運動感覚育成型

【活動のねらい】じゃんけんを通してステップの感覚を身につける

【コメントカードの記述から生成されたカテゴリーと代表的なコメント】

教材の階層性(3件)「太鼓の音に合わせてということでリズムを取りやすい。ステップ練習の下位教材となっていた」

アナログン(3件)「ねらいに沿っていた。リズム、ステップとダンスにつながる要素が多く良いと思った」

導入(3件)「じゃんけんにも勝った人の動きを真似することでヒップホップの動きに近づける良い導入だと思う」

運動量(1件)「運動量充分。体が温まった」

緊張感(1件)「タイミングが速くなったところでちょっとした緊張感も得られた」

安心(1件)「楽しみながら(競争)ステップにつながる動きができて安心して展開に移れる」

楽しい(1件)「ステップに近い動きをレジャー

感覚でできた」

【考察】

授業者役が設定した教材の類型が「運動感覚育成型」であり、活動のねらいが「走る一止まるの動きを手がかりに表したいイメージを表現する」であったのに対して、「教材の階層性」「アナログン」「導入」の各カテゴリーに分類されたコードが各3件あった。「ダンスにつながる要素が多く良いと思った」「じゃんけんにも勝った人の動きを真似することでヒップホップの動きに近づける良い導入だと思う」という代表的なコメントからは、教材「じゃんけんゲーム」はステップに含まれる運動感覚を育てる学習の導入に適した教材であると理解されていることがうかがえる。ねらいに応じた教材が実践されたと評価できる。

よって、各グループが構想し実施した教材の内容と受講者のコメントを分析した結果、いずれのグループも、設定した「教材の類型」や「活動のねらい」に応じた教材が実践されたと評価された。

5. 結論

以上のことから、平成30年に実施したダンス指導研修において、教材を構想し模擬授業を実施し合う知識・技能アウトプット型研修プログラムが有効であったかを以下に考察していきたい。

視点(1) 岩田の教材づくりの理論を枠組みにした教員研修プログラムは有効だったかに対する考察は、以下のようにまとめられる。

研修後のアンケート調査から受講者の研修の有効性に対する捉えをみると、教材づくりの理論を学んだことは、ダンス指導に関する知見を高めたり深めたりするのに概ね有効であったと受講者に捉えられていたことがわかった。教材づくりの理論については受講者全員が理解できたと捉えていた一方で、教材の階層性の理解はやや難しかったことが明らかになった。また、ダンス領域の特性に関わる教材理解も難しかったことがわかった。

模擬授業における教材づくりの構想と実践の実際をみると、受講者が研修で作成した教材の構想ワークシートとコメントシートの記述からは、どのグループも設定したねらいに応じた教材を構想し実施できていたと評価できた。

よって、アンケート調査の結果と模擬授業の実際から、岩田の教材づくりの理論を枠組みにした教員研修プログラムは、概ね有効だったといえる。

視点(2) 研修プログラムに、受講者同士が対話しながら模擬授業を作り上げていく体験を取り入れたことは有効だったかに対しては、研修後のアンケート調査から受講者の研修の有効性に対する捉えをみると、受講者同士で話し合ったり考えたりする活動を取り入れたことは有効であったと受講者に捉えられていたことがわかった。

視点(1) (2)から得られた結果と評価を総合的に考察すると、平成30年に実施したダンス指導研修の、受講者が教材を構想し模擬授業を実施し合う知識・技能アウトプット型研修プログラムは、概ね有効であったと評価できた。

6. 今後の課題

本研究の結果から、研修プログラムの改善への課題もみえた。受講者にとってダンス領域の特性に関わる教材理解が難しかったことから、素材研究を充実させることが考えられる。文化としてのダンスや運動遊びがどのような学習内容を潜在的にもつかを、アイスブレイク型・運動感覚育成型・構成原理習得型の3つの観点から探求できるようにしたい。その際には、受講者同士が仲間と共に対話し動きを体験しながら学び合えるような形態での研修プログラムを開発していきたい。

また、アンケート調査の他の調査項目の分析を進め、受講者の授業実践の状況と理論の理解度との関係についても考察していきたい。

注

1)岩田(1997)は、体育科教育における教材論の展開において、体育科教育研究者達が「教育内容」「教科内容」「学習内容」という用語を用いて各自の論を展開してきたことをふまえて『教育内容』『教科内容』『学習内容』という用語はすべて同義のものと理解しておく」と述べている(岩田,1997,p.242)。本研究では単元で展開される学習活動に焦点をあてているため、引用文を除いては「学習内容」という用語を使用することとする。

2)本研究では教科内容領域の階層的な構造における位置づけを示すため、<ダンスという運動領域の中に位置づく領域>という意味合いで<下位領域.>という用語を使用している。

3)岩田は「教材づくりの基本的視点」の図に、「素材」の例として「スポーツ」と「運動遊び」を記しているが、本研究ではダンス領域に特化して基本的視点を示しているため、「スポーツ」を「ダンス」に置き換えて、図を改変している。

引用・参考文献

- 1) 岩田靖 (1987) 体育科教育における教材論 (I)スポーツ教育学研究7(2) : 27 - 40.
- 2) 岩田靖 (1994) 教材づくりの意義と方法, 高橋健夫編. 体育の授業を創る. 大修館書店 : 東京. pp. 26 - 34.
- 3) 岩田靖 (1997) 体育科の教材づくり論, 竹田清彦・高橋健夫・岡出美則編. 体育科教育学の探求. 大修館書店 : 東京. pp. 223 - 251.
- 4) 岩田靖 (2012) 体育の教材を作る一運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて. 大修館書店 : 東京. p. 26, 28.
- 5) 岩田靖 (2015) 体育の教材づくりの発展, 中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則編. 21世紀スポーツ大事典. 大修館書店 : 東京. pp. 0536 - 0539.
- 6) 萱間真美 (2007) 質的研究実践ノート. 医学書院 : 東京. pp. 31 - 49.
- 7) 文部科学省 (2013) 学校体育実技指導資料第9集表現運動及びダンス指導の手引. 東洋館出版社 : 東京. pp. 104 - 105, 116 - 117.
- 8) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説(保健体育). 東山書房 : 京都. pp. 168-188.
- 9) 島根県教育庁保健体育課 (2017) 中学校体育教員武道・ダンス研修アンケート調査のまとめ. 島根県教育庁 : 島根.
- 10) 高橋健夫 (2015) スポーツ教育のカリキュラム, 中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則編. 21世紀スポーツ大事典. 大修館書店 : 東京. pp. 0526 - 0527.
- 11) 全国ダンス・表現運動授業研究会 (2011) 明日からトライ!ダンスの授業. 大修館書店 : 東京.

謝辞

本論文を作成するにあたり、多大なるご協力をいただきました島根県教育庁保健体育課指導主事の吾郷修治先生・中村展久先生(現在島根県立益田高等学校教諭)に、心より感謝申し上げます。

令和 元年 5月 31日 受付

令和 元年 11月 14日 受理